

「朧影」

アトリエ カルヴァドス 制作

大宗せいる 著

三日に亘った秋雨は未明にようやく勢いを弱め、黒雲の切れ間からやがて眩しい陽光が差し込んできた。草原に囲まれた小さな町に、一日の始まりを告げる鐘が鳴る。人々の目覚めを誘い、礼拝への参加を促すそれを響かせることが、若き神官ロムドアの日課だった。

ほどなく、朝食をすませた人々が集まってくることだろう。それまでに礼拝堂の支度をすませておかなければならない。

箒と雑巾を手に次なる仕事に向かった彼は、まず澱んだ空気を追い出しにかかった。薄い木窓を開くや否や、ぱつと陽光が飛びこんでくる。それを掌で遮りつつ、彼は靄に包まれた街並みを暫し静かに見やつていた。涼やかな秋風に含まれた、草の香りが柔らかく鼻をくすぐる。

ロムドアがこの町、ヴォルネドに派遣されてきて、もう二年あまりが過ぎ去った。ガイゼルの国都に生まれ育ち、そのまま大神殿に入った彼にとって、遠く離れた田舎町への赴任はまさに寝耳に水だった。熱心に仕え続けた水の女神

に、見捨てられた気さえたものである。だが、いざやって来てみると、そこでの生活は実に新鮮で充実したものだ。住民達は驚くほどに信心深く、併設された孤児院の子ども達もみな自分を慕ってくれる。

これも、女神の思し召しに違いない。

やがて住み慣れぬ教会にも馴染んだ頃には、そう考えられるようにさえなっていた。だが、今、突如として現れた人外の敵に、すべては打ち壊されようとしている。

キドロアの帝都、グレイージュールに向けて突進する妖魔は各国の軍隊を次々と打ち破り、すぐ北のズアナリス砦に迫りつつあるという。あの寂れた陣地を抜かれれば、帝都までは僅か数日の距離が残っているにすぎない。そしてその過程において、この平和な町はたちまち蹂躪されることだろう。

——我が女神、イリナルよ。その慈愛によって、どうかバーク様をお守り下さい。

砦で守備隊の先頭に立っている領主、バークベックを思い、ロムドアは頭を垂れて瞑目した。

いったい神々は何をしているのだ？　もしや、この帝国を、我らを見限られ、異界の住人を選ばれたというのか？　いや、創造主達は、きっと試されているに違いない。人が、自らの力でこの試練を乗り越えられるかどうかを。

「おはよう、ロムドア様！」

果てしなく続く自問自答に終止符を打ったのは綺麗に揃った、弾けるような呼びかけだった。振り返ってみると、孤児院の子ども達が慣れた手つきで床掃除を始めている。

「お、おはよう。みんな元気かな？」

「はい！ 元気でーす」

「もう、お腹ぺこぺこだよお」

一斉に返されたはしやぎ声を背に、一人の少女がぱたぱたと走り寄ってくる。

二、三度つまづきながら窓際にたどり着いた彼女は、円らな空色の瞳でじっとロムドアの表情を窺った。

「ねえ、どうしたの？」

「え？ いや、別にどうもしないけど」

「うそっ！ だって、お顔がいつもと違うもん。……お熱があるの？ それともおなか？」

見当違いとはいえ、なんと敏感なことだろうか。

「ありがとう、ターシャは本当に優しい子だね」

十歳に満たぬ孤児達のなかでもひとときわ小さなその身体を、彼はそっそとそつと抱きしめた。と、並んだ長いすの向こうで、たちまちざわめきがわき起こる。

その先陣を切ったのは女の子達の筆頭格、お転婆娘のルベリアだった。

「あー！ ぬけがけー」

ぽーんと箒を放り出した彼女は、長めの三つ編みを揺らして一目散に駆け寄ってくる。その後に男の子の大将、ヴィリータが続いた。

「こらあ、ひとりじめしないって約束だろ？ 義父さんはみんなのものなんだからな」

こうなつてはもう掃除どころの騒ぎではない。残った者も一斉に仕事を放棄し、ぱたぱたと集まってくる。その勢いたるやすさまじく、痛みきった木床が

抜けてしまうのではないかと、ロムドアは半ば本気で不安になった。

「ターシャ、ずるいぞ」

「そうだそうだ」

轟々たる非難を背中に浴びて、ターシャは狼狽も露に彼の胸を突き離す。白く透き通るようなその頬が、みるみる真っ赤に染まっていた。

「ち、違うもん！ そんなんじゃないもん！」

「そのとおりだ。ターシャは抜けがけなんてしていない。ただ、元気のない私を心配してくれただけなんだよ」

「えー？ そうなの？」

「ロムドア様、大丈夫？ どこか……、悪いの？」

わずかに目尻の上上がった顔立ちを、ルベリアは不安げに曇らせる。いつもはつらつとしている彼女の動揺は、たちまちのうちに周囲の子ども達へと広がった。感性が鋭いターシャなど、それだけでもう瞳を潤ませてしまっている。

「いや、そんなことないよ。風邪もひいてないし、お腹だつてこわしてないさ。だから、ほら、みんな安心しなさい」

「でもお……。それなら、どうして元気がないの？」 もしかして、誰かにいじめられたりしたの？」

間髪を入れぬターシャの問いかけに、皆は並べた肩をそろって乗りだす。どうやら、白状するしかなさそうだ。ロムドアは法衣の肩をゆっくり、静かに上下させた。頼るべき者の不安を知れば、彼らはますます動揺するかもしれない。が、すべてを打ち明ければ、きつといつまでも解放してはくれないだろう。

「はは、違うよ。実はバーク様の御無事を祈ってたんだ」

「ええ、そんなことなのお？」

「なーんだ。心配して損しちゃった」

「こら。そういう言い方は良くないぞ」

ろくに眠れぬほどの心配ごとを事もなげに受け流され、温厚なロムドアもさすがに語気を強めてみせる。

「あの方はこの国の民のため、皇帝陛下のため、めとられたばかりの奥様を残して戦っていらっしゃるんだ。そのことを、もつと真剣に受けとめなさい」

「へへーん、そんなこと分かってるよ。でも、バーク様が負けるわけないじゃないか。な？」

当然至極といった表情のヴィリータに、周囲も「そうだそうだ」と追随する。

「イリナルだって力を貸してくれるって、いつも自分で言ってるじゃない」

ルベリアの瞳はきらきらと輝き、若く逞しい領主への信頼と、勝利の確信に満ちていた。そう、彼らにとってバークベックは絶対的な英雄であり、生きる希望の象徴なのだ。

「ああ、そうだったね。では、私も余計な心配はしないことにしよう。だけど、礼拝の時にはみんなしっかりとお祈りするんだよ。我々の願いは、きっとあの方の元に届くのだからね」

「はーん」

「よし、それじゃ仕事を続けよう。急がないと、皆さんが集まってきてしまう」
バークベックの私費により、教会の裏庭に小さな家が建てられた。それは、自分が赴任してくる少し前のことだったという。彼は飢えたみなしご達をそこに住ませ、日常の世話をガイゼル大神殿に依頼した。ときおりやって来ては

気さくに話し、一緒に戯れてくれる彼に、子ども達はすっかり心酔しきっている。

「ロムドア……」

法衣の袖を不意に引かれて、彼ははっと我に返った。見ると、思いつめた表情のターシャが、厚手の生地を固く握りしめている。

「ん？ なにかな？」

「バーク様、まものなんかに負けないよね？ きっと、やつつけてくれるよね？」

それはルベリアやヴィリータの反応とは正反対の、なんともか細く不安げな問いだった。それも無理はない。旅の途中で両親と死に別れた彼女は、飢えと乾きで動けなくなっているところをバークベックに救われた。直接の命の恩人であるためか、彼への懐きようは子ども達の間でもひととき強い。

「ああ、大丈夫だよ。だから、ターシャも自分の仕事をきちんとやっておくんだけ。あの方が戻られた時に、胸を張ってお迎えできるようにね。ほら、元気をだして。君がそんな調子だと、こっちまで辛くなってしまっじゃないか」

「え？ また、さつきみたいになっちゃうの？」

上擦った声に合わせて、おかつぱの金髪が揺れる。少し可哀想だと思いつつも、彼は胸を押さえて大きく天を仰いでみせた。

「そうさ。ほら、もう息が苦しくなってきた。うう、君が元気になってくれれば、すぐに治るんだけどなあ」

「あ、あ。タ、ターシャ、掃除するっ！」

箒を抱えてあたふたと走り去る姿に、ロムドアの口から笑いまじりのため息

が洩れる。

戦いの結果は神のみぞ知る、だ。自分とて、尊敬する領主の栄光を信じたいし、その剣術の鋭さを目の当たりにしたこともある。だが、敵は異界の住人、各国の精鋭を苦もなく打ち破ったという、恐るべき妖魔なのだ。とても、個人の力量で対抗できる相手とは思えない。

ぼやけていく視界を、彼はそう広くはない礼拝堂に巡らせた。以前と変わらない、賑やかな掃除の光景。だが、どこかが違う。子ども達、なかでも年長のルベリアやヴィリータ達は、現実を敏感に感じ取っているに違いない。それでも泣き言をこぼそうとしないのは、バークベックへの純粋な想いからだろう。

「この子達のこと、どうぞよろしくお願いします」

数日前、砦に向かう途中で町に立ち寄った領主は、名もない神官である自分に深々と頭を下げた。その時の驚きと感激を呼びおこしつつ、彼は灰色の瞳を窓へと向ける。空はどこまでも透き通り、絹糸の如き雲が鮮やかな筋を引いていた。

「バーク様、どうぞ御武運を」

礼拝堂を吹き抜けていく秋風に、小さな祈りが乗せられる。その後ろを、子ども達の声が賑やかに追いかけていった。

それからしばらくすると、人々が三々五々礼拝堂に集まってきた。子ども達によって短く鐘が鳴らされ、それを合図にイリナルを讃える祈りがはじまる。慣れた調子の斉唱に、しかし以前のような活気はない。彼らの視線は虚ろであり、表情もすっかり憔悴しきっていた。

戦況が明らかになるにつれ、礼拝に赴く者の数は日毎じわじわと減っている。以前はぎつしり埋まっていた長いすも、今では半分以上がむき出しのままだ。

無論、残っている者達とて出来ることなら逃げ出したいに違いない。だが、なんらかの理由がそれを許さずにいる。先祖伝来の家や土地かもしれないし、生きていくための蓄えかもしれない。領主バークベックへの信義という者もあるだろう。

「皆さん、ようこそお集まりいただきました」

やがて祭壇に上がったロムドアは、努めて明るい調子で切り出した。そしていつもの通り、イリナルの教えをそれに続ける。生きることは時に苦しく、時に哀しい。人は多かれ少なかれ、そんな重荷を背負って生きていく。それ故に隣人を気遣い、助けあい、一日一日を大切に生きねばならないのだ、と。

しかし、いくら言葉に力をこめ、また抑揚を強めても、人々の表情が晴れることはなかった。そう、彼らは耳を傾けているようで、その実聞いてくれている。その心に女神の恵みは届いていない。追いつめられた彼らが見ているのは、神ではなく人なのだ。帝国に、いやこの町にとって最後の砦であるバークベックに縋るため、彼らはここにやって来ている。

不謹慎だとは思ふ。だが、それも仕方のないことだろう。彼の戦いの行方は、そのままヴォルネドの存亡に直結している。

それなら……。イリナルの代弁者たる自分は、なんのためにここにいるのか？ 懸命に彼らを励ましつづけるロムドアの胸に、いつもと同じ無力感が広がっていく。そして今日のそれは礼拝を終え、自室に戻ってからも決して消えてはくれなかった。

「危険にさらされているのはこの町だけではない、か」

小刻みに震えるロムドアの手には、届けられたばかりの羊皮紙が握られている。彼は深いため息とともに、それを窓際の机へと放りだした。落とした腰を受けとめて、寝台がきいっと高い呻きをあげる。

十日あまり前のことである。国都の息子を頼っていった老人に、彼は大神殿宛ての書簡を託した。

逃げ場を持たない人々が、この町ヴォルネドには大勢いる。この戦いが終わるまででいい。神殿の力を以て、彼らを救ってやってはくれないか。金銭を援助するなり、他の町に仮の住まいを用意するなり、してやれることはいくらでもあるはずだ、と。しかし、そんな彼の願いは結局受け入れてはもらえなかった。

この神殿を守り、教えによって人々の心を癒す。それが、重鎮達からの指示だった。それもいいだろう。イリナルの使徒となることを選んだ時、彼女にこの命は捧げたつもりだ。だが、あの子達はいったいどうなる？

彼らの人生は始まったばかり。道連れとなってイリナルに召されるには、まだあまりに早すぎる。そして自分は、あのバークベックとの約束を結局果たせないことになるのだ。事ここに至って、ロムドアはついに決意を固めた。

神殿の命に逆らっても、あの子らとともに生きのびる。即刻破門されるだろうが、慈愛の女神は決して咎めたりしないだろう。

「……そうするしかない、か」

二、三度弾みをつけて立ち上がった彼は、そのまま重い足取りで部屋を出た。

とにかく急がねばならない。人々に事情を説明し、神殿を閉めて旅に出る。そ

れには、早く見積もっても二日はかかる。そしてなにより、子ども達を納得させる必要があった。おそらく、一筋縄ではいくまい。霞がかつた頭をふと、泣きわめくターシャやルベリア、それにヴェリータの顔が過ぎった。

礼拝堂を抜けて表に出ると、生け垣に囲まれた庭は一面の花畑となっている。少し前までは小ぶりの深紅の花が咲き誇り、まるで赤い絨毯を敷きつめたように見えたものだ。だが、秋が深まるにつれてその勢いはすっかり衰え、もう花のある株はほとんどない。

殺風景だったこの庭を見事な花畑に変えたのは、やはりバークベックの力だった。ある日、舶来の種と球根を携えて現れた彼は、それを子ども達に育てさせてはどうかと提言してくれたのである。共になにかを為すことは、彼らにとって貴重な経験になるだろう。なによりも施しではなく、自身の力で生きていくことが大切なのだ、と。

手探りで始めた栽培に、皆は夢中になって取り組んだ。バークベックの言葉通り、一緒になって土にまみれた経験は、子ども達にとっても自分にとっても大切な宝物となっている。そしてその成果が、やがて孤児院の運営に余裕を与えた。

珍しい舶来種の花は、たちまち町の話題となった。春と夏の盛りには摘んでも摘んでも決して絶えることがなく、切り花となって人々の生活を潤すのだ。さらには、この花を大層気に入っているバークベックが大量に、また相場より高く買い取ってくれる。決して贅沢は出来ないものの、食事や衣服を賄うのに十分な収入だった。

どこに逃げるにせよ、持てるだけの種と球根を持っていこう。ふと浮かんだ

考えに、ロムドアは独り静かに頷いた。と、それを待っていたかの如く、傍らで透き通った美声がかかる。

「おはようございます、ロムドア様」

はっと上げられた瞳に、長い黒髪を靡かせた、若い女性が映りこむ。

「ああ、シオーヌさんですか。おはようございます」

微笑みで応えたシオーヌは、それから両手を揃えて軽く一礼を試みせる。いつもながらわざとらしさを感じさせない、謙虚で可愛らしい仕草だった。

「あの、どうかされたんですか？ とても深刻な顔をされていたらっしやいましたけど」

「あ、いえ。花盛りの頃を思い出していたんですよ。今年は暑かったせいか、実に見事な出来映えでしたからね」

「本当に！」

不意に声を弾ませたシオーヌは、夢を見るような眼でゆっくり周囲を見渡した。

「あれを見て、この町に来て良かったと思いました。慣れない生活でたまっていた疲れが、みるみる消えていく気がしましたわ」

彼女がこの町に流れてきたのは、今から半年ほど前のことだ。衣服の仕立てや修繕で生計をたてる傍ら、手が空いた時にはこうして子ども達の世話をしに来ている。その大らかな性格が彼らにも気に入られたらしく、その慕われようはまるで実の姉のようだ。

「でも……、妖魔が攻めてくれば、きっと滅茶苦茶にされてしまうんでしょうね」

寂しげに洩らされた呟きに、ロムドアはなにも答えてやれなかった。すべてを棄てて逃げようとしている自分に、それを否定することなどできない。知らず強ばってしまった表情を、小首を傾げたシオーヌが見つめる。そして、笑いまじりのため息。

「ふふ。ロムドア様は、ごまかすのが苦手なんですね」

「は？」

「本当はなにか心配ごとがあるのでしょうか？ 眼がそうおっしやってますわ」

「え？ そ、それは、その……」

頭に運ぼうとした手を、不意にシオーヌの掌が包みこむ。

「あ、え、ええ？」

思いもしなかった展開は、大いにロムドアを狼狽えさせた。たちまち顔が熱くなり、鼓動が早まるのを感じる。しかし、そんな彼の動揺を、シオーヌはまったく気にかけてもいない。

「あの、私でよろしければ、聞かせてやって下さいませんか？ 何もできないかもしれませんが……でも、誰かに話せば少しは楽になると思うんです」

その表情に澱みは見えない。どうやら、純粹に心配してくれているらしかった。自責の念にかられつつ、ロムドアはそっと腕を引き戻す。支えを失ったシオーヌの掌が、二つに分かれて落ちていった。

「そうかもしれませんがね。では、少しお時間をいただけますか？」

「はい！ 勿論です」

弾んだ肯定に後押しされ、彼は口ごもりながらも己の決意を打ち明けた。情けないことだが、出来ることはそれくらいしかない。そのくせ、心のどこかに

はまだ迷いがあるのだ、と。

「そう、だつたんですか」

やがてすべてを吐露し終わると、シオーヌはその青く澄んだ瞳をゆつくりと地に向けた。

「でも、そんなに自分を責められないで。ロムドア様は間違つてなどいません。少なくとも……、私はそう思います」

「ありがとうございます。あなたにそう言ってもらえると、とても気が休まりますよ」

「ただ、みんなはきつと悲しむでしょうね。思い出でいっぱいこの場所を、棄てていかなくはならないなんて」

ぽつりと洩らされた呟きが、胸の奥深くに突き刺さる。声を失う彼を見つめたまま、シオーヌは哀しげに言葉を繋いだ。

「実は……、ターシャのことでお話しがあるんです」

「ターシャの……、なんでしょうか？」

その名を聞かされた途端、ロムドアの顔色がたちまち変わる。最も心配していたのが、他ならぬ彼女のことだったからだ。誰よりバークベックを慕う女の子は、この決意をはたして受け入れてくれるだろうか？ 心に受けるだろうか深い傷から、立ち直つてはくれるだろうか？

「あの子、さつきからずっとふさぎこんでいるんです。私は勿論、ルベリア達がいくら話しかけても、何も答えてくれなくて」

「分かりました、さつそく行ってみましょう。でも、いったいどうしたんですよね。朝は、元気に私を励ましてくれたのに」

「それなんですけど……」

「は？ 何か心当たりがあるのですか？」

「礼拝の後、あの子が大人達に突っかかっていたんです。外に出てからの話ですから、御存知ないと思うんですけど」

「あの優しい子が、ですか？ まさかそんな」

「いいえ。優しいから、ですよ」

不意に強められた語気に、ロムドアは思わず言葉を失った。彼女がこうした感情を露にするなど、まったくもって珍しい。

「私、慌てて止めに入ったんですけど、どうやらこういうことらしいんです」

町には失望と苛立ちが充満しつつある。パークベックはきつと勝てないだろう。こういう時のため高い税にも耐えているのに、彼をはじめとする騎士達はいったい何をやっているのだ。イリナルの神官も綺麗ごとを言うばかりで、まったく気休めにもならない。

声高に交わされたそんな愚痴を、ターシャは聞いてしまったのだ。追いつめられて余裕がなくなっているのだろう。むきになって喚きちらす少女を、彼らは散々に罵ったらしい。善意で町に住まわせてやっているのに。そう、口走った者さえいたそうだ。周囲に諷められて彼らが引き下がった後、ターシャはいつまでも泣きじゃくっていたという。

「酷いですよね。誰だって、好きで孤児になったわけじゃないのに」

「シオーヌさん」

沈黙を挟んでの呼びかけに、美しい黒髪がふわりと揺れた。

「……はい？」

「これから、子ども達の元へ行こうと思います。ターシャを励まし、それから

私の決意を伝えるつもりです。よろしければ、一緒にいらしていただけますか？」

「勿論です。よろこんでお供します」

彼女の浮かべた微笑みが、今はなによりの救いに思える。寄りそうように肩を並べて、二人は花畑の小道を歩きはじめた。



覚悟していたとはいえ、彼らを納得させるのは辛く、大変な仕事だった。バークベックが負けるというのではない。だが、だからといってこの町が安全だという保証もない。そんな理屈が、彼らの澄んだ想いにかなうわけはなかった。

「そうね、あなた達の言うとおりだわ。ロムドア様だって、きっとそう思ってる」

シオーヌが助け船を出してくれなかったら、あの決意はきつと揺らいでいたことだろう。

「でもね、ロムドア様はみんなのお父さんなのよ。親が子どもを心配するのは当たり前でしょう？　ねえ、ルベリア、それは分かるわよね？」

「う、うん。でも、バーク様が負けるわけ……」

「言ったでしょう。それは分かってるんだって」

ルベリアが紡いだ切り札を彼女は微笑みながら、しかしばつさりと切り捨てた。凜とした物言いに周囲で上がりかけた非難が力を失い、やがて霧散していく。

「それでも、よ。みんなに悪く言われるのは承知のうえで、ロムドア様はこうすることに決めたの。どう、ヴィリータ？ その気持ちに応えてはあげられない？」

「え？ そんなこと言われたって」

車座となった子ども達は、それでもなお躊躇っているようだった。そんななか、不意に小さな掌が差しあげられる。

「ターシャ、ついてく！ だって、ロムドアは嘘なんかつかないもん」

驚いたことに、もっとも手こずるだろうと思っていた彼女が、最初の賛同者になってくれたのだ。今の今までじっと伏せられていたその顔には、いつの間にかいつもの明るさが戻っている。

「ねえ、ターシャ。ほんとにいいの？」

ルベリアの問いかけに、力強い頷きが返された。最年少のターシャにそう出られては、他の子ども達も心を決めるしかない。それまでの紛糾ぶりが嘘のように、たちまち話がまとまった。ロムドアが自室へと戻ったのは、数日ぶりの太陽が地平に向けて滑りはじめた頃である。

「さて、と。のんびりしている暇はない」

疲れ切った心を奮い立たせ、彼はさっそく書物の整理に手をつけた。

戦いさえ終われば、すぐにこの場所へ戻ってこられる。だから、余計な物は持っていない方がいい。先刻、子ども達にはそう伝えた。だが、その頃には既に神殿の一員でなくなっているだろう、自分は別だ。新たに派遣されてくる同朋に、余計な手間をかせぎたくない。

棚から一冊つつ抜き出した書物を、彼は几帳面に机上へと並べていった。平

積みにして縛っておけば、処分もしやすいことだろう。手元に置きたいものがあつたら、そこから抜き取ってくれればいい。

「それにしても……」

——シオーヌさんのおかげで助かった。

ふと洩れた呟きを、心の声が静かに引きつぐ。

「ロムドア様と違って、私は他人ですから。だから、あんな言い方ができたんですよ」

本人は照れくさそうに笑ってみせたが、決してそれだけではないだろう。おそらく、シオーヌの精神は自分などよりはるかに強い。

もしも出来るなら、一緒に行ってくれないものか。整理の腕を止めた彼の心を、ふとそんな想いが過ぎる。背後の扉が二度、三度と鳴ったのは、ちょうどそんな時だった。

「ロムドア様♡ いらっしやいますか、ロムドア様？」

狼狽えた口調は、誰あろうシオーヌのものである。一旦、自宅に戻ったはずだが、何を慌てているのだろうか？

「どうしました？」

「ああ、いて下さって良かった」

急いで顔を覗かせると、彼女は胸に手を置いて、大きく息をついてみせる。

その青ざめた表情からは、今しがたの「強さ」などこれっぽっちも感じられない。

「あの、町でフェリックさんにお会いしたんです。そうしたら、すぐにロムドア様にお会いしたいっておっしゃって」

「フェリック君が？ 来ているのですか？」

「はい、礼拝堂でお待ちです」

馴染みのある名前を聞かされて、ロムドアの緊張は一気にとけた。

彼はバークベックの従者であり、その元で騎士になるための修練に励んでいる。どこぞの貴族の出であるらしいのだが、そんなことを鼻にもかけない、実に気さくさな青年だった。

任務で動けぬバークベックは、それでも子ども達の生活ぶりを知りたいらしい。その使いでやってくる彼はロムドア達にとって、そのまま領主の無事の知らせであった。

「分かりました。さつそく出迎えにいきましょう」

声を弾ませつつ扉をくぐった彼を、不意にシオーヌが引き止める。

「待って下さい。それだけじゃないんです」

振り向いた先の表情は、さらに動揺の度合いを増していた。考えてみれば、彼女としてフェリックを、そして彼がやってくる理由をよく知っているはずである。

「どうしたのです、シオーヌさん。先ほどから、どうも様子がおかしいですよ」

「彼と一緒に、騎士の方がお見えなんです。かなり高貴な方だとお見受けしたんですけど、どうもただごとじゃない感じでした」

「はあ？ どういうことですか？」

「分かりません。とにかく、二人の雰囲気尋常じゃないんです。それに、町の外に兵隊が集まってきていて」

不安げな説明に、ごくりとロムドアの喉が鳴る。吹き払われかけていた暗雲

が、再び心を覆いつくしていった。

開け放たれた窓から秋の陽が長く差しこみ、通り抜ける風がなにやら微かなざわめきを運んでくる。がらんとした礼拝堂には、大小二つの鎧姿が佇んでいた。

「お久しぶりです、ロムドア様」

ほどなく現れた二人を、フェリックはいつもの調子で迎えてくれた。だが、シオーヌの説明通り、その表情からはどこもない緊迫感が感じられる。いや、ひよつとするとそれは、傍らの大柄な騎士から発せられているのかもしれないかった。シオーヌはどうにも居心地が悪そうに、少し離れたところで身を縮こませている。

見たところ、バークベックと同年代だろうか。フェリックのものとは比較にならない立派な金属鎧に身を固めた男は、にこりともせずじっとこちらを見つめている。日焼けした肌や太い腕の無数の傷が、否が応でも凄惨な戦場を連想させた。見るからに鋭い眼光は、そこでの厳しさによるものなのか。

「元気そうでなによりです。バーク様の命であちこち飛び回っていると聞き、少し心配していましたよ」

静かに差し出した掌を、フェリックは力強く握りかえた。汗ばんだ指先がわずかに、しかし確かに震えている。やはり、いつもの彼ではなさそうだった。

「いやあ、ご心配おかけします。でも、ただの連絡係ですから大丈夫ですよ」
案の定、そこでフェリックの顔から笑いが消える。

「実は今日もそうなんです。こちらのルードベルフ卿の補佐として、お邪魔しました。卿は黒鷲騎士団に所属されており、バークベック様とは旧知の仲でい

らっしゃいます」

「ロムドア殿、挨拶は無用だ。貴君については、奴から詳しく聞いている」

鎧姿が進みでると、重みで苦しげに木床が鳴いた。その胸元では、彫り物の鷲が大きな翼を広げている。前に見たバークベックの鎧と、まったく同じ紋章だった。

「そ、それは恐縮です」

「頭を上げてくれ。とにかく、急ぎ協力してもらいたいのだ」

「は、あ。いったい、どうすれば良いのでしょうか？」

銀鎧の肩越しに、フェリックが苦しげに視線を逸らす。どうやら、良いことでないのは確かなようだ。シオーヌもまた、同じことを考えているのだろう。靡く黒髪の向こうに、緊張した表情が見え隠れしている。だが、そんななかで、ルードベルフだけは顔色一つ変えてはいない。

「なに、大したことではないさ。鐘を鳴らし、民衆達を集めてくれるだけでいい。そこから先、彼らへの説明は私の仕事だ」

「説明？ なにを説明されるのですか？」

答えの変わりとばかりに、ルードベルフはそこで初めて口元を緩めてみせた。決して優しくはない、さらに視線が鋭くなった分、恐ろしささえ感じさせる笑みだった。

「どうせ後で分かるのだから、ここで言っても仕方がなからう。さあ、もう日没まで時間がない。急いで皆を呼び集めてくれ」

はるか上の身分の者にきっぱり言い切られてしまったのは、もはや素直に従うしかない。彼らの対応をシオーヌに任せて、ロムドアは独り礼拝堂の奥へと向

かった。

赤く染まりはじめた空の下、高く低く鐘が鳴る。繰り返されるその音に導かれ、やがて町の人々が次々と集まってきた。

それにしても、この町のどこにこんな大勢の人がいたのだろうか。朝とは打って変わって長いすはびっしり埋まり、通路もろくに歩けない有り様だ。そればかりか、それでも入りきれない者達が間口の向こうで人だかりさえ作っている。祭壇に上がったロムドアは、そんな彼らを複雑な想いで見つめていた。

町の外には、続々と兵が集結しつつあるという。それもあって皆、ただならぬ気配を感じ取っているのだろう。不安げなざわめきが高い天井に反響し、低い唸りとなって戻ってくる。彼らの表情は、礼拝の時とは明らかに違う。希望ではなく怯えであったにせよ、そこには生の気配が満ちていた。

「よし、そろそろいいだろう」

やがて民衆達の動きが落ち着いてきたところで、ルードベルフが壇上に上がってきた。そして、中央へと進みでながら、すうっとその肩を持ち上げる。

「静かに！ 皆、聞いて欲しい」

それは今までの印象通りに太く、迫力のある呼びかけだった。戦場でも、きつとこんな雄叫びを上げているのではなからうか。鼓膜を揺るがさんばかりの音量に、たちまち民衆達が静まり返る。

「こんな時間にわざわざ集まってもらい、心から感謝する。その理由は他にもない。領主バークベックに代わって、貴君らに重要な知らせを伝えるためだ」

慣れたもので、ルードベルフはそこで若干の間を空けた。「重要」と聞いてざ

わめきかけた人々が、口を噤むのを待っているのだ。礼拝の時には、自分もしばしばこの手を使う。それは説教をする立場になって、体験的に覚えた話術の一つだった。

「一度しか言わぬから、よく聞いて欲しい」

やがて頃合を見計らい、ルードベルフは再び声を張りあげる。

「戦が終わるまでの間、貴君らには国都へと移ってもらう。これより自宅に戻り、すぐに荷造りを整えよ」

ほんの短い静寂を挟み、礼拝堂は歓喜の声に満たされた。そのあまりの激しさに、思わずロムドアは耳を押さえる。そして、領民思いの領主に心で何度も感謝した。見れば、足を踏みならす人々の先頭でシオーヌも微笑んでいる。腑に落ちぬのは、フェリックの反応だった。

壁にもたれかかった彼は感情の抜け落ちた表情で、ひとり窓の外を眺めている。先ほどの態度といい、いったいどうしたというのだろうか？

「出発は明朝だ。それまでに、手配できるだけの馬車、荷車を用意しておく。ただし、女子どもと年寄りの分だけだ」

ようするに他は歩けということだが、それに異を唱える者はいなかった。背に腹は代えられぬといったところだろう。町を離れられなかった理由は人それぞれ、ごく少数であるものの不安げな者、不服そうな者もいる。だが「戦いが終わるまで」は、辛抱してもらおうしかない。ひとまず最前線から離れ、そこで領主の勝利を祈る。自分達に出来ることは、ただそれだけなのだから。

「以上だ。貴君らの静聴に心より感謝する」

ルードベルフが締めくくると、人々は我先に、慌ただしく立ち去っていった。

ほどなくして礼拝堂に静寂が戻り、残っているのは元の四人だけとなる。

「良かったですね、ロムドア様。町の人達も子ども達も、これで危険な目に遭わなくてすみますわ」

白い歯をこぼしたシオーヌに、彼は安堵の笑みで応えてみせた。しかし、不意に荒げられたフェリックの声が、たちまちそんな雰囲気を一変させる。

「何もいいことありませんよ！」

「は、あ？ フェリック君、先ほどからどうも様子がおかしいですよ。いったい、どうしたというのです？」

呆気にとられての問いかけに、フェリックは暫し言葉を詰まらせた。見ると、腰のあたりで握りしめられた拳が、小刻みにぶるぶると震えている。

「あなた方は、知らされていないだけなんだ。なぜですか、ルドベルフ卿。どうして、あの方を貶めるようなことをされるのです？」

「貶める？ なんのことだ？」

噛みつかれたルドベルフに、しかし動揺の色はない。ロムドアとシオーヌは全くわけの分からぬまま、互いの顔を見合わせた。

「彼らは皆、いずれは戻ってこられると思っている。それでは、バークベック様が彼らを裏切るようになります」

その言葉が終わらぬうちに、ロムドアの心に衝撃が走った。

戻れないということはつまり、ヴォルネドは滅ぶということなのか？ バークベックが、人が敗れるということなのか？

「ほお……。では、どうすれば良かったのだ？」

「決まっているでしょう。真実を打ち明け、分かってもらおうのです。それが、

騎士たる者の取るべき道ではありませんか」

「世迷い言もいい加減にしろ！」

興奮のせいかな、すっかり紅潮したフェリックの顔に、太い腕がいきなり伸びる。なおも何事か発しようとした口元を、広げられた指ががっしり掴んだ。

「……ひ？」

「とんだ世間知らずだな、お前は。さすが、あの男に仕えているだけのことはある」

もがく彼の悲鳴を意にも介せず、ルードベルフは一頻り乾いた笑いを響かせた。

「それで彼らが納得するというのは？ 己の町が焼け野原になると聞かされ、

『はい、どうぞ』と頷くだけでも？」

「あ、あの！ いったい……、それはどういうことなのでしょう？ 焼け野

原というのは、まさか？」

「ああ、そのまさかだ」

ようやく枷から解放されたフェリックが、傍らでへなへなどしゃがみこむ。

だが、今のロムドアに彼を気遣う余裕はなかった。あのシオーヌでさえ、口を覆ったまますっかり安心してしまっている。

「だが、勘違いするな。すべては戦に勝つためだ。この町には、奴らの力を削ぐための捨て石となってもらう」

戦いの理屈など、自分には分からない。だが、つまりはこういうことらしいか
った。

妖魔達は、決して裸で戦っているわけではない。彼らもまた、手駒となる兵

隊を持っている。そしてそれは、自身が手にかけて人間の亡骸なのだという。彼らは不可思議な術によって無数の亡者を操り、かつての同朋を襲わせているというのだ。巨大な壁となって向かってくる亡者達を滅しなければ、肝心の妖魔と戦うことすらできない。

勿論、そのための対策は練られていた。だが、現れた亡者が予想外に多かったことで、計画を変更せざるを得なくなった。つまり、直接の対決を避け、小競り合いを繰り返しながら彼らをこの町へ誘いこむ。そして、灼熱の炎で一網打尽にしようというのだ。建物の大部分は木造だから、確かにその勢いたるや凄まじいものになるだろう。

「そ、そんな……。バークベック様はお認めになっけいらっしやるのですか？」

「ロムドア殿。どうやら、貴君も勘違いされているようだ」

「は？ しかしこの町はあの方の……」

「あの方、か。貴君らに言わせると、あの男はまるで神だな。だが、それは違う。法剣の使い手といっても、奴はあくまで一部隊長にすぎんだ。その一存で、作戦を覆せるわけなどないだろう」

どこかで聞いたような話だ。混乱しきった心で、ロムドアはぼんやりとそう考えていた。

「では、私はこれで失礼する。奴の屋敷に赴き、奥方の旅支度を手伝わなくてはいけないのでな」

こちらの声を待たず、ルードベルフはさっさと歩いていってしまう。潤んだ瞳で一礼し、フェリックもその後が続いた。残された二人は何も言えぬまま、ただ呆然と彼らの背中を見つめていた。

戦の大局の前では、辺境の町の存亡など取るに足らないものでしかない。心の支えである強く優しい領主も、国家という巨大な組織においては大勢の騎士の一人にすぎない。重々分かってはいるつもりだったそんな現実が、心を暗く沈ませていた。だが、いつまでもそれに囚われてはいられない。

荷造りをするというシオーヌを見送った後、彼はすぐに子ども達の元へ赴いた。出発が早まることを知らせるためである。真実には触れず事実だけを告げたから、皆はすぐに頷いてくれた。

そう、今は知らない方がいいだろう。いや、知らせるべきではない。ロムドアはそう考えていた。すべてが終わり新しい生活が落ち着いてから、時間をかけて受けとめさせよう、と。

大急ぎの荷造りは、夜遅くになってようやく終わった。かなりどたばたしたものの、取りあえずは一安心である。床の準備をすませたところで、ロムドアは寝着のまま外に出た。

秋の夜は驚くほどに静かで、そして平和だった。風はまったくなく、虫達の声だけが穏やかに響いている。妖魔が迫りつつあることが、まるで嘘のようだった。家々の窓に、明かりはほとんど残っていない。明日の旅立ちに備え、みな早めに就寝しているのだろう。シオーヌも、もう荷造りを済ませたのだろうか。

「……最後の夜、か」

手持ちの種と球根は、既に麻袋のなかである。新しい土地でも、見事に咲き誇ってくれることを願いたい。蒼い月光が照らす花畑を、ロムドアは独り静かに見つめつづける。そんな自分の様子を誰かが窺っていることに、彼はまったく気がついていなかった。

「義父さん……、義父さんったら！」

暗闇の向こうから、ヴィリータの声が聞こえてくる。床に入ったのはつい先刻だった気がするが、どうやらもう朝らしい。就寝が遅かったこともあるだろうが、なによりもそれだけ疲れていたのだろう。

「ねえ、早く起きてよお！」

激しく肩を揺すられて、ロムドアは重い瞼を持ち上げる。と、細い視界で、眩しい陽光がきらめいていた。正直なところ、もう少しだけでも眠っていたい。だが、やがて目の当たりにした必死の形相に、たちまちそんな甘えは消し飛んだ。

「ヴィリータ…… いったい、どうしたんだい？」

「早くして……。大変なんだ」

その声はすっかり上擦り、瞳は潤みきっている。今の今にも泣き出しそうな状態だった。

「それだけでは分からないよ。落ち着いて、ゆっくり説明してごらん」

だが、そんな窘めも、ヴィリータの耳には届いていないようである。彼はごしごしと眼を擦り、せっぱ詰まった声を張りあげた。

「ゆっくりなんかしてられないよ！ ターシャが、ターシャがいなくなっちゃったんだ！」

「な、なんだって？」

「ターシャがいないんだよ。朝、起きたらベッドが空になって、みんなで探してみただけど、どこにも見当たらないんだ」

「それで、みんなは？」

「家にいる。ルベリアは外も探そうって言うんだけど、義父さんが来るまで待つてろって止めたんだ」

ついに堪えきれなくなつたのか、その頬をぼろぼろと滴がつたう。

「よくやったな。……偉いぞ」

抱き寄せた胸元で、苦しげな嗚咽が洩れた。彼とて動転しないわけがない。

本当は、ルベリアと同じ気持ちだったに違いなかった。だが、年長者の自覚でなんとか堪え、考えうる最善の方法を選んだのだろう。

「よし、すぐに行く。ヴィリータ、君は町に行つて、シオーヌさんと呼んでくるんだ。どうだい、できるかい？」

寝着を脱ぎ捨てながらの問いかけに、彼は腕でぐいと涙を拭う。そしてそのまま、脱兎の如くに部屋を飛びだしていった。その後ろ姿に頼もしさを感じながら、慌ただしく法衣を着こむ。

「おやすみ、ロムドア」

昨夜、そう頬を寄せてくれた彼女に、別段変わった様子はなかった。いや、この町を去らなければいけないのだから、内心では辛かっただろう。だが、少なくとも、それを表に出そうとはしなかった。あの後に、何があったのだろうか？

「ロムドア様！ ターシャが大変なの」

慌ただしく教会を出たところで、三つ編みを揺らしたルベリアが走りよってきた。見ると、花畑になにやら子ども達が集まっている。

「ああ、ヴィリータから聞いたよ。それより、彼から家で待っているように言

われなかったかい？」

心の揺れを懸命に抑えつつ、ロムドアは彼女の行為を窺めた。それどころではないことは分かっているが、いつも通りにしなければ彼女らはますます狼狽えてしまうだろう。

「うん。でも、じっとしていらなくて、みんなでもう一度探してみたの。そうしたら……」

「い、いたのか？」

「ううん。そうじゃなくって、行き場所が分かったの」

「ええ？ いったいどこだい？」

「こつちよ」

言葉の意味が分からぬままに、ロムドアは腕を引く彼女に従った。連れていかれたのは子ども達の集まっている場所、ちょうど花畑の中央あたりである。

「ほら、これ見て」

彼女が指し示した先には、いくつかの小さな穴が空いていた。どうやら、株を掘り返した跡らしい。飛び散った土が乾ききっていないから、まだそう時間が経ってはいないようだ。

「これをターシャが？ いったい、なんのために？」

そう呟ききらぬうちにロムドアはある、最悪の仮定に行きついた。まさかと打ち消そうとしたそれを、ルベリアの震える声が確信に変える。

「あの子、寝る前に言ってたの。『バーク様、お花見たがってるだろうな』って。きつと……、きつと皆に届けに行ったんだわ」

おそらく、そうに違いない。この町を出ることに、ターシャは真つ先に賛成

の手を上げてくれた。ひよっとしてあの時、彼女はこうすることを決意していたのではあるまいか。せめて別れの挨拶をすませていこうと、そう考えたうえで頷いてくれたのではあるまいか。

「……なんてことだ」

彼女に限らず、子ども達のこととはそれなりに分かってやっているつもりだった。が、すべては傲慢な自己満足、身勝手な自惚れだったのかもしれない。あの時、彼女の想いの深さを感じ取ってやれていれば、おそらくこんなことにはならなかっただろう。

ぐらりと揺れた視野が、青く染まりつつぼやけていく。ふらつく足下に力を取り戻させたのは、背後から届いた呼びかけだった。

「ロムドアさまあ！」

我に返って振り返ると、向こうから二頭の馬が駆けてくる。二人乗りの後ろはシオーヌとヴィリータ。操っているのはフェリックと、もう一人は軍の兵士だろうか。ほどなくして馬の足が止まると、彼らは一目散にロムドア達の元へ走り寄ってきた。

「ターシャ、見つかりましたか？」

悲鳴に近い問いかけに、ロムドアは力なく首を振る。

「なんてこと。もう出発まで時間がないのに」 口を覆うシオーヌの肩に、静

かに法衣の袖が近づいた。やがて掌が触れると、彼女の視線がふわりと上がる。

「シオーヌさん、頼みがあります」

「は？ なん、でしょうか？」

「私はターシャを探しに行きます。その間、この子達を待たせておくわけには

いきません。安全のためにも、他の方々と一緒の方が良いでしょうね。ですから、彼らを連れて、先に出発して欲しいのです」

「そ、そんな……」

「こんなことを頼むのは、お門違いかもしれない。それを承知でお願いします。あなたが一緒なら、みんなも心強いでしょう」

深々と頭を下げるロムドアに、子ども達の潤んだ瞳が向けられる。心細げに肩を寄せ合う彼らを一頻り見回した、シオーヌの表情がわずかに和んだ。

「いいえ、違うんです。子ども達のことには、もちろん引き受けさせていただきますわ。私が不安なのはロムドア様のことなんです。だって、お独りで行かれるなんて無茶ですわ」

その通りかもしれない。平時においてさえ、町の外は決して安全とは言いがたい。ましてや、現在の状況ではなおさらだろう。

だが、それでも。いや、だからこそ迎えに行つてやらなければ。独りきりの草原で、ターシャはどれほど心細い想いをしているだろう。一刻も早く抱きしめて、安心させてやりたかった。そして、歳にそぐわぬ無理をさせてしまったことを、心から詫びたかった。

「はは、大丈夫ですよ。二人で必ず追いつきますから、それまでみんなを守つてやって下さい」

シオーヌの不安げな上目遣いに、ひくつく口元を緩めてみせる。そんな彼の眼前に、すつとフェリックが進み出た。

「彼女の言うとおりですよ。こんな時に町の外をうろつくなんて、自殺行為もいいところだ」

「そ、その自殺行為をターシャはしているんですよ。誰かが迎えに行つてやらなければ、あの子は……」

「落ち着いてロムドア様。私は、独りでは危ないと言つてゐるんです。お供させていただきますから、もう少しだけ待つて下さい」

「……え？」

声を失うロムドアに軽く頷いてみせてから、彼は馬上の兵士へと視線を移す。

「あなたの部隊の者を、十人ほど連れてきて下さいますか？」

「は、あ？」

その意味が掴みきれていないのか、まだ若い彼の口から気抜けした声が洩れだした。手綱を緩められた栗毛の馬が、まるで嫌々をするように首を振る。

「聞こえませんでしたか？　すぐに町へ戻り、兵を連れてきて下さい」

「ま、まさか、この者達に付き合おうというのですか？」

「ええ、そうですよ。困っている民衆を、このまま放つてはおけないでしょう？」

「し、しかし、そのような命は受けておりません。それ以前に我々は、本来ならここにいるはずがないのです。お気持ちは分かりますが、まずはルドベルフ卿の許可を得るのが先決では？」

「そんな暇がどこにある？　少しは状況を考えろ！」

それは、普段の温厚さからは想像もできない、まるで唸りのような一喝だった。金属鎧がちやりと鳴らし、兵士は慌てて首を竦める。圧倒されてしまったのは、勿論彼だけではない。怯えの視線を漂わせる子ども達から、やがて微かな嗚咽が洩れはじめた。

「あ、み、みんなごめんな。つい、かっとなつちやって」

動揺も露に彼らの頭を撫でながら、フェリックは鋭い視線を馬上に向ける。

「あなた方に迷惑はかけませんから、どうぞ安心して下さい。私はこう見えても卿の補佐を任じられた身、不相応ながら命令順位は二番目のはず。ならば、責任をとるのも私ということです。さあ、分かったら急いで！」

「は……、ははっ！」

彼の毅然とした態度に気圧されたのか、それともその気構えに感じるものがあつたのか、若き兵士は見違えるような身のこなしで馬を走らせていった。

「良かったのですか、こんなことをして」

「うーん。騎士の本分からして、あまり良くはないでしょうねえ」

ふと口をついた問いかけに、振り返ったフェリックが笑ってみせる。

「でも、間違ったことはしてませんから。バークベック様があの場にいれば、きっと私と同じ判断をされたはず。あの方はこういう時のため、私をこの任に就けたんだと思うんです」

大草原に行く彼らの周囲は、なんとか集まった六人の兵に固められている。陽はすっかり高くなってしまったが、未だターシャの姿は認められない。

ロムドアの焦りは、いよいよ大きくなりはじめていた。なにしろ幼子の足ゆえ、そう遠くまで行けているとは思えない。岩への道はこの一本だけなのだから、そろそろ追いつけてもいいはずだった。だがそれも、彼女が迷ってしまっていなければの話である。

道と言っても、しょせんは踏み固められただけのもの。勿論、柵などありはしない。ましてや国都に通じる方とは違って、こちらの往来は極端に少ない。

足下は悪く、場所によっては草に侵食されてしまつてさえている。

「ターシャは、きつと大丈夫ですよ。実は、今朝から砦の部隊が引き上げはじめているはずなんです。北に向かつてさえいれば、必ずそれに出会いますから。ひよつとしたら、もう先頭の部隊に保護されているかもしれないですよ」

「そう、ですね」

フェリックの励ましに、彼は弱々しく微笑むのが精いっぱいだった。彼方の丘の上に、ターシャが目指しているだろうズアナリス砦が霞んでいる。風に波打つ草原は、まるで幼少の頃に見た大海原だ。このなかにさまよい込まれてしまつたら、事はフェリックの言葉ほど簡単ではなからう。「必ず出会える」などとは、きつと彼自身も思っていないに違いない。

——イリナルよ。どうか、あの子をお守り下さい。我らが行くまで、力づけてやして下さい。

主神の慈愛に縋りつつ、ロムドアは彼女の姿を探し求める。と、その視界の片隅を、見覚えのある色合いが行きすぎた。

「……あつー！」

見紛うことか、路傍にあの花が落ちている。この地に自生してなどいないから、ターシャが持ち出したものに間違いなかった。季節に逆らつて未だ花を残した株は、しかし黒土にまみれ、無惨にもペしやんにされている。

「どうしました？」

振り返つたフェリックが、訝しげにこちらの視線をたどっていく。やがてその瞳が止まるや否や、鎧姿がぐらりと揺れた。

「こ、これは……。どうやら、一人や二人に踏まれたのではないようですね。

それに、周りの草が倒れているのも気にかかります」

緊張した声色が、さらにロムドアの不安を煽る。

「フェリック殿、もしや……、奴らが通った跡ではありませんか？」

一人の兵の問いかけに、たちまち周囲の者達が顔色を変えた。その動揺ぶり
はかなりのもので、あの若者など早くも剣に手をかけている。

「もうこんなところにまで？ いや、いくらなんでも早すぎますよ」

青ざめたフェリックが、いったいなにを恐れているのか？ ロムドアにも、
それは容易に想像できた。ここに至るまで、人の姿など見ていない。引き上げ
てくるという部隊にしても、まだここまで到達してはいないだろう。とすれば、
残された可能性は一つしかない。

「三人ほど一緒に来てもらえますか。残りの方々はこの場から動かぬように。
ロムドア様から、決して離れないでいて下さいね」

剣を抜きはなつて草むらに分け入っていく彼を、ロムドアはぼんやりと見つ
めていた。息をするのも苦しく、指の震えが止まらない。

——どうか無事で、無事でいてくれ。

虚ろとなった意識のなかで、彼にはそう祈ることしかできなかった。

慎重に周囲を見回しながら、フェリック達は徐々に道から遠ざかっていく。
小さくなった鎧姿の一つが慌ててなにかを指したのは、それからほどなくし
てのことだった。そよぎ行く風に乗って、微かにフェリックの叫びが届く。

「ターシャ！」

——ま、まさか

「待て！ 動くんじゃない」

次の瞬間、ロムドアは脱兎のごとく駆けだしていた。背後からの制止も、今の彼には聞こえていない。絡みつく草に足を取られ、土を喰い、そのたびに傷を増やししながら、彼は夢中で走りつづけた。そして、鎧の背中をかき分けるようにして、フェリック達の輪に飛びこんでいく。

「……あ？」

刹那、心のなかでなにかが弾けた。身体中の腱を切られたように、その場へなへなとしやがみ込む。

血の海に横たわったひと形は、確かにターシャのものだった。だが、そこにもう彼女はいない。それは、ただの抜け殻だった。恐怖の表情を斬り裂いた傷はそのまま顎を通り抜け、腹部にまで到達している。

「ターシャ……」

そつと触れた彼女の拳は、すっかり冷たくなっていた。硬直した指の間から、真つ赤な切り花がぼとりと落ちる。

「う、わあああ！ こ、こんなうそだ。嘘だ。嘘だあつ！」

大地に突っ伏した彼の口から、たちまち黄色の吐瀉物が噴きだした。堪える気力など、もはやない。継りも、祈りも、希望も、すべてが崩れさつていく。

継つたとて意味はない。祈つたとて届きはしない。

「も、亡者だつ！ すっかり囲まれてるぞ」

「くそっ！ いったい、いつの間に」

「一点突破でぐり抜ける。全員、剣を抜け！」

そんな周りの叫び声も、今の彼にはどうでもいいことだった。

「さあ、ロムドア様。なんとしてでも、ターシャを連れて帰ってやりましょう」

——嫌だ。

立ちたくない。もう、なんにも考えたくない。ターシャの骸を抱きしめて、彼はただ首を振るのみだった。

それからのことは、どうもよく覚えていない。子ども達に再会するまでの記憶と言えば、あの花畑にターシャを弔ったことだけだ。深紅の花びらが混じった土に、小さな身体がだんだんと覆われていく。最後に見たその表情だけは、今でも心に焼きついたままだ。

子ども達の泣き声を聞きながら、なにを口走ったのかは分からない。だが、直後に頬を走った痛みとそれに続くシオーヌの叫びで、麻痺していた心はようやく、少しずつ動きはじめた。

「そんな哀しいことを言わないで！ ロムドア様、あなたはこの子達の父親なんですよ？ あの方やイリナルのことなど、今は関係ないでしょう？」

「ちち、おや……？」

徐々に焦点を取り戻した視界で、彼女は顔を覆って泣いていた。

「この子達にとって本当に必要なのはあの方なんかじゃない。側にいるあなたなんです。もしあなたがいなくなってしまったら、みんなは誰に楽しかったことを話せばいいんです？ 誰に悩みを相談したらいいんです？ あなたがそんな調子で、誰が力を与えてやれるんですか？ お願いします。どうか、しっかりとなさってください」

震える肩ごしに、子ども達の嗚咽が届く。ルベリアもヴィリータも、こぼれる涙を拭おうともしていない。赤い眼は一樣に虚ろで、その表情からは、あの瑞々しい生気が抜け落ちていた。

——いけない。彼らを残していけなどしない。

思ったのはそれだけだった。だが、それだけで充分だった。



早いもので、あれから三年の月日が過ぎ去った。そして今、彼は再びあの花畑に立っている。今年のターシャの命日は、実に見事な満月だ。ちらほら咲いた深紅の花が、おぼろな光に浮きあがる。

軍の作戦は予定通り実行され、ヴォルネドの町は亡者共々焼き払われたと聞いていた。実際それは確かなようで、ここにはもう建物らしい建物は残っていない。焼け残った柱や土台だけが、元々は町であった事実を示すのみ。教会や孤児院も猛火を免れることはかなわなかったらしく、やはり綺麗さっぱり燃えつきてしまっていた。だが、驚くべきことに、あの花畑だけはちゃんと残っていたのである。いや、残っていたどころではない。教会の跡、孤児院の跡、そして道だった場所までをも、すっかり覆いつくしてしまっている。少し前の花盛りには、さぞや見事な光景だったことだろう。

持ち出した種も球根も、風土が合わぬせいなのか国都では結局うまくは育たなかった。そんな気難しいこの花が、ここでは見事に自生している。一度は炎に焼かれ、また世話する者すらいなくなってしまうたにも関わらず、だ。

いったい、どうしてなのだろう？ 理由が土地にあるならば、バークベックはきつと知っていたに違いない。ここが育成に適しているのを見越したうえで、種と球根を持ちこんでくれたのだろう。それとも、もしかや花達にも心があって、

あの子の想いを酌んでくれているのだろうか？

彼女が亡くなってから今日まで本当に色々なことがあり、色々なものが変わっていった。

バークベックは結局戻ってきてはくれなかった。この町を亡者とともに焼き払い、彼は裸となった妖魔に勝った。だが、最後に残った彼らの王を倒すため、まだ若かった領主は自らの命を差しだした。本当のところは分からない。が、少なくとも世間にはそう伝えられた。

あの娘の死を、バークベックはずっと気に病んでいたという。彼女を殺したのは、他ならぬ自分だ。あのような小細工など、要らぬまでの力があれば、と。だが、そんな後悔とは裏腹に、彼は一地方騎士から理想の騎士に、ターシャ達の英雄から帝国の英雄になった。そして、そのことが、自分達の住む世界を大きく変えた。

英雄の近くにいた者達に、世間は驚くほど優しくかった。国都にはすぐに新しい、立派な孤児院が建設され、自分はその長にかつぎ上げられた。辞意にも関わらず押しつけられた、大神殿の神官長と兼務である。故にたとえ花が育たなくても、生活に困ることはなかった。いきなり変わった環境に子ども達は戸惑いを隠さなかったが、それでも最近ではうまく順応しているようである。

人々は皆、影を見ている。自らの想いの、影を見ている。騎士とはこうあるべきだ。領主とはこうあるべきだ。彼らの理想がバークベックを英雄に祭りあげ、自分達を話題の中心に引きずりだした。だが、彼らの口から、あの騎士の名前が語られることはない。

ヴォルネドを発って三日目、一行は多数の亡者に襲われた。夕食のさなか、

まったくの不意打ちだった。

「昔から、奴とはぶつかってばかりでな。想いは同じはずなのに、どうにも意見が合わぬのだ」

ルードベルフが苦笑してみせたのは、騒ぎの直前のことである。人々を逃がすため勇敢に立ち向かっていった彼は、しかしそのまま帰ってこなかった。

後から聞いた話だが、彼は最後の最後まで、あの作戦に反対していたそうである。苦悩の末に心を決めたバークベックと、何度も激しい口論を交わしたらしい。

バークベックとはあまりに違う男だったが、彼もまた立派な騎士の一人だった。そんな名もなき英雄達は、他にもたくさんいたに違いない。

「英雄、か。そんなものになるより、とにかく生きていて欲しかった」
知らず口をついた呟きに、焚き火の向こうでフェリックが頷いた。鷲の彫りこまれた銀鎧が、炎に照らされて美しく輝く。

「そうですね。バークベック様が亡くなったなど、今でも信じられません。教えていただきたいことが、まだまだたくさんあったのに」

戦が終結して間もなくすると、彼には騎士の栄誉に加えてバークベックの残した領地が与えられた。新任の騎士としては、勿論異例のことである。

「復興の具合はどうですか？ 苦労していると聞いていますが」

「ええ。やはり一度出ていった者達は、なかなか戻ってきてはくれないます。

この調子では、ヴォルネドの再建など夢のまた夢ですよ」

「そうですね。それは大変ですね」

「はい。でも、勝負はまだまだこれからですよ。バークベック様なら、一体ど

うなされたか。それを考えながら、なんとかやっていくつもりです。それにほら、有能な片腕もいますしね」

問いなおすまでもなく、それはヴィリータのことだろう。向こうで毛布にくるまった彼は、ルベリアと寄り添ってすやすやと眠っている。

彼は現在、フェリックの元で修行に励む毎日だ。ターシャのような犠牲者をもう二度と出さないために、自分は立派な騎士になりたい。そんな彼の決意に、反対する理由は勿論なかった。

フェリックによれば、彼の剣技は「そこそこ」なのだそうである。その一方で発案力には素晴らしいものがあり、見習いでありながら復興の一翼をしっかりと担っているという。そういえば、この墓参りも元々は彼の提案によるものらしい。

「実際のところ、騎士になる日もそう遠くはないでしょう。バークベック様の忘れ形見として、既に注目的ですしね。ただ、そんな重圧に押しつぶされやしないかと、それだけが心配なところです」

「いえいえ、大丈夫。彼なら実力で、きっと立派にやっていきます。ところで、ルベリアの方はどうですか？ どうも、少し痩せたように見えるのですが」

「あはは、お気づきになりましたか？ でも、どうぞご心配なく。痩せたのは、自分でそうしているからですよ」

「は、あ？」

思わず首を傾げた先で、フェリックの口元に苦笑が浮かぶ。

「実は彼女、ヴィリータと大喧嘩しましてね。その時に体型のことで何か言われたらしいんです。で、それからあんまり食べなくなっちゃいました。身体に

悪いと注意しても、頑として聞いてくれないんですよ」

「やれやれ……」 なんにしても、相変わらず仲良くやっているらしい。

彼女は、ヴィリータと共にこの地へ戻った。フェリックの屋敷に住みこんで、男達の世話に明け暮れているという。三つ編みを下ろしたせいだろうか、久しぶりにあった彼女は年齢以上に大人びて見えた。ちょっとした言葉づかいや草も、すっかり女性のそれになっている。

彼女からの手紙で旅の誘いを受けた時、実を言えば大いに迷った。

ターシャは許してくれるのだろうか。独りよがりの想いに拘り、結局分かってやれなかった自分を。心底取り乱し、ろくに別れの言葉さえかけてやれなかった自分を。

だが、そんな自分に、シオーヌは事もなげに笑って言った。

「あら。ターシャの方は、きつと会いたがっていると思いますけど?」

すぐ傍らに腰を下ろした彼女は、先ほどからずっと聞き役に回っている。ときおり頷いたり微笑んだりするだけで、その視線は月光の花畑に向けられたまままだ。冷たさを含んだ秋の夜風に、長い黒髪がふわりと揺れる。

恥ずかしいことだが、シオーヌには助けられてばかりいる。国都での生活とて、彼女がいなければどうなっていただろう。最近は神殿の仕事に時間を取られ、一人では子ども達の世話すらおぼつかない。そんな自分を助け、彼女は母親役を立派にこなしてくれている。子ども達にとってなくてはならない存在であるし、自分にとってもそれは同じだ。

大神殿の者達を相手にしていると、苛だつことも多い、悔しいことも多い。だが、そんな心の軋みを、彼女の微笑みは癒してくれる。

「フェリック君……。申しわけないが、少し席を外して下さい」

そう言い終わるより早く、シオーヌの首が跳ね上がった。フェリックの視線が忙しなく行き交い、やがて彼女の顔で静かに止まる。

「私からもお願いします。暫く、二人きりにしていただけませんか？」

「本当に……。いいのですね？」

どこか意味ありげな問いかけに、彼女は無言で頷いた。

「分かりました。では、少し散歩してくるとしましょう。もし何かあったら、すぐに呼んで下さいね」

軽く微笑んだフェリックが、そのままくると踵を返す。その銀鎧が闇に消えるのを待って、ロムドアは彼女の隣に腰を下ろした。

「シオーヌさん。出発前にしたお願いの答えを、ここで教えてはいただけませんか？」

一瞬視線が絡み合い、そして再び解れていった。それを足下の花へと落とし、シオーヌは力なく首を振る。

「ごめんなさい」

「あ……」

「ごめんなさい。お気持ちは嬉しいんですけど、でも、どうしても駄目なんです」

「そ、そうかあ……。うん、そうですね。あなたには、もっと相応しい相手がいらっしやいますよねえ」

「いいえ、違うのー！」

突然荒げられた語気に、はっとロムドアが息を呑む。頬を紅潮させた彼女は

さらになにかを言おうとして、しかし何ごとか躊躇っている様子だった。幾度か空回りの唇が、やがて上擦った声色を紡ぎはじめ。

「誤解しないで下さいね。本当に、とても嬉しいんです。あの事があってから、いえ、その前だって、あなたはいつとも子ども達のことを考えていた。みんなを育てていくために、一生懸命頑張っていた。心から尊敬していますし、素敵だとも思います。でも……、駄目なんです」

——どうしてですか？ もしもそれが本当なら、どうして駄目だというのです？

声になりかけた問いかけは、潤んだ瞳に封じこまれた。虫達の鳴き声と炎に薪が弾ける音が、暫しあたりを支配する。

「私は……、バークベック様の女でした」

「は？ いったい、どういうこと、ですか？」

「その前は、ベルダで遊女をしてたんです。でも、ある宴席で偶然あの方と一緒にになって、そしてこの町へ越してくるようになった。その意味は、勿論お分かりになるでしょう？」

「ま、まさか！ そんな、莫迦なことが」

ロムドアはそれだけ言うのがやっとだった。愛妻家のバークベックが実は情婦を囲っていたなど、どうにも受け入れがたかった。

「ふふ、信じられませんか？ なら、フェリックさんに伺ってみて下さい。彼だけは、最初からすべて知らされていましたから」

フェリックが何を気にしていたのかを、彼はそこでようやく悟った。あのシンオーヌへの問いかけは、こうなることを見越してだったに違いない。

「あの方に、英雄なんて似合わない。だって、私の前では普通の男でしたもの。理想家で、意地っぱりで、寂しがり屋のくせに強がってばかりいる。そんな、どこにでもいる男でしたわ」

そう呟く彼女は、微笑みながら泣いていた。透き通った滴がぼろぼろと頬をつたい、長い黒髪のなかへ吸いこまれていく。こんな弱々しい彼女を見るのは、出会って以来はじめてだった。

「あの方はいなくなってしまうわ。だけど、私だけは本当の彼を忘れないでいよう。ずっとそう思っていました。なのに……、なのに駄目なんです。心に浮かぶ微笑みが、日毎に薄れていくんです」

「シオーヌ、さん……」

「これでお分かりになったでしょう？ 私はそういう女なんです。お金で買われた相手を、不相応に愛してしまうような。そして、そんな想いさえも守ってはいけないような。そういう節操のない女なんです」

彼女もまた、影を見ていた。バークベックが残していった、己への想いの影を。身を縮め、嗚咽を洩らす彼女の姿に、あの頃の自分がふわりと重なる。

「いったい、何に苛まれていたのだろうか？ 何に怯えていたのだろうか？ 何に失望し、何に縋ろうとしていたのだろうか？」

「あの……。少しだけ、私の話を聞いて下さい」

細かく震える彼女の肩に、そっとロムドアの手が伸びる。

彼女も自分も、まだまだ長い時を生きていく。そう、たとえ嫌でも生きていくのだ。いつか時の流れが止まるまで、心の影は決して消えてはくれないだろう。だが、影は影だけでは存在し得ない。ならば、こうも言えはしないか。そ

れは今、こうして生きていることの証なのだ。

たとえ理想にはほど遠くとも、今この時を精いっぱい生きていく。自分にはただそれだけしかできないし、おそらく彼女もそうだろう。あのバークベックとて、きつと同じだったに違いない。

「怖がらないで、シオーヌさん。自分の影に怯えちゃいけない」

月明かりに照らされて、二つの影がそっと寄り添う。様子を見守っていた花達が、夜風を受けて一斉にその葉を鳴らした。

了

着 稿 一九九八年 九月三十日

第一版 一九九八年 十一月九日